

さらに、ステイーヴンソンの優れた見解について述べておきたいと思います。スピリチュアリズムの観点と照らし合わせた時、ステイーヴンソンの研究の中で最も驚かされるのは「ある人格がそっくりそのまま生まれ変わるといふことはない」という指摘です。これは私達スピリチュアリズムになじんでいる者にとつては、再生におけるインディビジュアリティとパーソナリティの問題であることがすぐに理解されます。

再生を理解するうえで極めて複雑で難解な問題が、「前世の何が再生するのか」ということでした。シルバーバーチは、地上において表現されるパーソナリティが次の再生時にそのまま現れることはないと言っています。再生するのは、パーソナリティよりもっと大きな自我（インディビジュアリティ）の別の部分であると言ふのです。そのことは地上サイドから見れば、全く別のパーソナリティ（地上の人物像）が現れるということなのです。考えようによつては、地上人が思い描くような再生はない、ということなのです。しかも現実の再生には、さらに複雑な要素が加わります。それが、「類魂のメンバー（部分）としての再生」という一面です。幸いなことに私達は、シルバーバーチやマイヤースなどの霊界通信によつて、その複雑な再生の実態を、さまざまな角度から眺めることができます。そして再生とは、一般の人々が

とかく考えるような、同一人物像（同一人格）の再現ではないということ、はつきりと知ることができました。

退行催眠によつて思い出したとされる前世像は、明らかに同一人物像（パーソナリティ）としてのものであり、同一人物としての前世が、まるで小説の主人公のように描かれています。しかし現実には、そうした前世はないのです。今、私（自分）として自覚し意識している私と、前世の私（としての人物像）は違ふのです。

今、私達もっている「私という意識・自覚」は、過去にも未来にも存在しません。つまり、今の「私という意識」だけを基準にして見れば、過去世はなかったということ、今現在、私として自覚している存在は、過去に地上で生活していたことはないのです。このように地上サイドの視点から見ると、「私という意識・自覚」の連続性がないため、再生はないと言えます。

しかし、それを霊界サイドの視点、インディビジュアリティという全体をふまえた観点から見ると、再生はあるということになります。つまり、インディビジュアリティとしての私の一部が地上に出現するということ、この観点から見れば、過去と、現在と、未来の“地上の存在”に、一貫した連続性があることになります。このように、霊界での視点に立ってはじめて、再生があり、前世があると言えるのです。